

## 復活節第7主日礼拝 説教「心の目を開いてください」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2017年5月28日

### エレミヤ書 10章 1～11節 ルカによる福音書 24章 44～53節

武義和先生をお招きし、主の恵みの中  
に、聖歌隊、子ども聖歌隊によるチャ  
ペルコンサートを終え、この度の出来  
事の中に、今この私たちが語ること  
すべてが現れていると、私たちが教会  
の時を刻むという事は、そうした主の  
恵み一つ一つ積み重ねていくことも  
あり、御言葉が「エルサレムから始  
あなたはこの証人と、主の証人と、  
よように主から多くの恵みを受ける  
ことでもあるからです。それゆえ、私  
たち藤沢教会の可能性の大きさを知  
た先週のコンサートの中に、私  
来年の二月には百周年を迎えること  
の、この百年の歴史を見ること  
のです。

ただ、それについては、私たちは誤解  
してはならないように思います。なぜ  
なら、歴史の中には、美談もあれば、  
ゴシップもあり、それ以上に、その歩  
み半を占めるのは、記録に残されるこ  
とがない、何気ない私たちの日常的な  
やり取りだからです。また、だからこ  
そ、日々、神様の御前に置くその姿を  
通し、神の家族としての教会の姿は、  
具体性を帯びることもなるのです。  
ですから、誇らしげなものも、また  
恥づかしいものも、それぞれの個性  
がぶつかり合うように、私たちが、  
だから、神様かから恵みとして、  
感謝して受け止めることのできる  
のです。

従って、教会の歩みとはつまり、理想  
化するものでもなければ、矮小化する  
ものでもないということです。御言葉  
が、神様の御前に立つ共同体の姿を  
理想化せず、そのありのままを示す  
のは、それゆえ歴史のことであり、私  
たちもまた、自らの歴史を見つめよ  
うとするなら、掛値のない、主の恵  
みに満たされたい。その姿を見出す  
必要があるのです。そして、それは、  
イスラエルが、偶像礼拝を固く禁じ  
られていたにもかかわらず、繰り返  
し金の子牛を拝むようになり、そこ  
で見出しうるものは、罪深く、愚  
か、滑稽な、神の御前に立ち、時  
を刻む共同体の姿でもあるというこ  
とです。そして、御言葉が、その偽

様を率直に記すのはまた、人が理想と  
するものは、時間に耐え得ず、やがて  
朽ち行く定めにあるからです。

従って、御言葉が、この日私たちに  
語りかける「彼らはイスラエルを伏  
し拝んだ後、大喜びでエルサレムに  
帰り、絶えず神殿の境内にいて、神  
を褒め称えていた」と語ることは、  
私たちが信仰者の姿を現すと同時に、  
しかし、その姿を一つの理想として  
語ってはいないということです。それ  
は、ローマの支配下にありながら、  
こうして御言葉に聞くルカの教会に  
とって、教会としての時を刻み続け  
るためには、理想などという朽ち行  
くものではなく、朽ちることのない  
神様の導きに対する、開かれた視点  
が必要であったからです。それゆえ、  
この続けるということが、教会にと  
つての最大の課題となり、また、そ  
れ以前に、神様に導かれ歩む神の民  
イスラエルにとっても、それは同じ  
ということでした。

エレミヤが、その神様に背く様子を  
語るには、時を刻み続けるというこ  
とが、たとえ神の民であっても、理  
想を語るようにはうまくいかなか  
ったからです。そして、この生々し  
い現実の中に生きるには、イスラ  
エルだけでなく、私たちも同じで  
す。ただ、そうした中で、主の日を  
待ち望み続ける私たちは、こうして  
福音に聞くことが許されているわけ  
ですが、このことはつまり、福音に  
聞き、語り続けるということとは、  
理想を掲げ、理想を振り回すよう  
なものではないということです。なぜ  
なら、私たちが神の家族として、  
イエス・キリストの現実に立ち、歩  
み続ける中で明らかにされる真実  
こそが福音でもあるからです。

ですから、私たちのそうした歩みの中  
には、当然のことではありますが、私  
たちにとっての不都合なものも包み  
込むことにもなります。主の昇天の  
後、地上に残された弟子たちにと  
って、共に集まり、礼拝し続ける  
ということは、気分がいいばかり  
ではなかったからです。つま  
り、礼拝で味わい知る喜びとは、  
現実を誤魔化し、取り繕うこと  
で得られる快感ではなく、主と共  
に正しく生きることで与えられ  
る喜びであるということです。従  
って、気分が悪くなるもの、目を  
背けたくなるもの、そういうもの

れ合っているという感覚を同時に含むものでもあるということ。そして、教会が、そのような面倒な歩みを続けることができたのは、何があるとも、主を間近に感じ、思う経験を、人々は、日々、積み重ねることが許されたからです。

それゆえ、ここに記されている主を礼拝する弟子たちの姿とは、間もなく百年を迎えようとしている私たちの、次の百年に向かうそのまの姿でもあると言えらるるのでしょう。そして、それは、私たちににとっては、雲を掴むようなものではありません。すでに私たちが、この百年味わい続けてきたものであり、戦争中であるろうが、なんであるろうが、主を礼拝することを辞めなかつた私たちの歩みの中に、この世に生きる信じる者の姿がしっかりと現されているのは間違いのないことだからです。

そこで、次なる百年に備えるため、今、私たちが心すべきことは何か。それは、「主と共に私たちはある」という現実にしかりと立つこと。しかし、このことはまた、主の昇天を経験した弟子たちがそうであるように、「主はどこに」との思いをひた隠しにすることではありません。イエス様をその目で見たり、その手で触れたりすることが叶わない以上、「今すぐにここで」との要求に対しては、誰も応えることができないからです。けれども、そのことを理由に「共にいます主」の存在を否定するのは誤りです。なぜなら、不安定とも思えるそうした状況の中で築かれてきたものが、私たちの歴史でもあるからです。ですから、いつ戻るともしれぬ主を待ち続けるということとは、つい横道に逸れたくもなります。偶像礼拝とは、そういう、つい寄り道したくなってしまう人間の心根の弱さに起因するものなもしれませんが、だからこそまた、道を踏み外さぬよう、私たちが、固く自らを戒めていなければならないのでしょう。

しかし、どんなに自らを叱咤激励しても、その心根の弱さに敗北し続けてきたものがイスラエルであり、教会でもありました。私たち藤沢教会もそうです。百年史に目を通せば、そこに、神様に許しを請うしかない自らの姿というものを認めることができるからです。けれども、眉をひそめなくなるような出来事が、この百年の中に置かれていたとしても、私たちに、それをそのまま記す正直さがあり、また、この正直さゆえに、今があるのです。ですから、先週私たちが味わ

た藤沢教会の可能性の高さというものは、この正直さゆえのことでもありました。

そして、私たちの歴史を現すこの「正直さ」であります。それは、イエス様への感謝とお詫びとを、日々、私たちが言葉に表す中で養われるものでもありました。「ごめんなさい」、「ありがとう」と、そう言い続ける「素直さ」が私たちの歴史を築いてきたということ。ですから、その歩みは、素直なだけに行き過ぎることもあり、また、素直さゆえに、精一杯、一生懸命という真面目さとして表されることもありました。そして、先週、あれだけ大勢の人たちが教会に足を運んでくださったことは、親しい方々を誘う私たちが、主と共にいますことを素直に正直に喜んでいいるからでもありました。

そして、礼拝を献げる私たちが、そのようにイエス様を前にし、正直で素直でいられるのは、イエス様のことをアイドルのように、偶像のように受け止めるのではなく、現実のことと受け止めているからです。つまり、私たちにあってイエス様とは、リアリティーをもった家族の一員であり、私たちは、そのことを実際にイエス様と共に歩む中で知らされてきたのです。ですから、どの神様が一番いいかなどと、えり好みをするような愚かな真似はしません。礼拝という、イエス様と私たちとが一つであることを確かめる場、ひとときが私たちには与えられており、この聖なる方との直接的な関わりの中に置かれている自らを、私たちは確かめることが許されているからです。

それゆえ、礼拝を通して、私たちは、イエス様に対しても、神様に対しても、妄想を膨らませるような浅ましい真似はしません。聖なるものと触れ合っているという経験が、私たちに謙虚にし、素直にもさせるからです。イエス様を信じる私たちの正直な姿とは、そういうイエス様との触れ合いの中で養われるものであり、また、それを体験しているからこそ、私たちは、これからも、その喜びを素直に正直に人に伝え続けることができるとです。偽るのでもなく、また、誤魔化すのでもなく、さらには、妄想を膨らませるのでもなく、自らの歴史を素直に正直に受け止め、新たな百年に備えつつ、神様が私たちの下へと送り出す人々と共に、この喜びを分かち合う日々をこれからも歩んで参りたいと思います。

祈り